

創造と表現の病理

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□はじめに□

司 会 島 崎 敏 樹

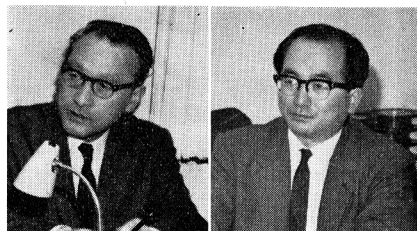
この主題が日本精神神経学会の総会において組織的にとりあげられたのは今回が初めてのことであつて、あるいは今後しばらくその機会はないかもしれない。

この主題をめぐつてシンポジウムをひらく意義がどこにあるかを一言述べる。自分の好きな作家なり、画家なり、作曲家なりがあつて、かれが心に偏りをもつていたか狂気になつたかした場合、自分がたまたま精神医学にたずさわつていたことから、その人物の作品の精神医学的分析を行なうことはだれにもできる。しかしそれはまだ科学に距離がある。このような個人的関心から進んで、共通の、通分された、だれとでも客観的態度で討論できる次元にまでゆかなければ、科学の場での厳しい認識の眼に堪えない。

きよりの集まりは、そうした認識の眼になつた次元にまでわれわれの分析の結果を練りあげるよい機会と思われる。

第Ⅰ部では、人間の創造性というものを病理的なものをとおして、いわば裏側から攻めることによつて、表てからでは不可能であつた認識を可能とする、その原理論と方法論を検討したい。つづいて第Ⅱ部では、ひとりひとりの創造的人間について、病跡学的な処理がどのように展開され、どのような結果が出たかを、つまり各論を行なう。それから第Ⅲ部においては、近來方々で実施されるようになってきている芸術療法について、専門の研究者から、経験と今後の見通しを聞けると幸いである。したがつて、このシンポジウムでは、認識としての病跡学と実践としての芸術療法とをとりあげ、それをただ個別的な症例として終らせず、また実地的な問題だけにとどまらず、もつと普遍的な理念にまで純化させることができればこの集会は成功と思われる。

写真 左：司 会 島崎敏樹氏（医歯大神経）
右：副司会 荻野恒一氏（南山大）



*第 17 分科集会，1966 年 4 月 8 日，於東京国立教育会館